公園にて

詭弁

「おっさん、大丈夫？」
青い虚空を眺めている時、そいつは唐突にそう話しかけてきた。何がだ、と言うと、だってそんな面していい大人がブランコ揺らしてるなんて絶対なにかあっただろ、と返された。
「別に、何があったわけでもねえよ。ただ時間を持て余してるだけだ。その前に、お前こそ知らない大人にいきなり話しかけるなんてどうしたんだ」
そいつの顔を見ながら、どこかで会ったような気もしないな、と考える。年齢は中学生程度だろうか。しかし今日は水曜日、まだ放課後という時間でもない。
「いや、なんとなく雰囲気に親近感があってさ。おっさん、何してる人？」
言って、そいつが隣のブランコに座る。
「ただのフリーターだよ、悪いか。あとさっき言い損ねたけど、俺はおっさんじゃなくて須賀だ。おっさん呼ばわりされる歳でもねえし」
遠慮というものを知らない言葉にますます奇妙な奴だと思いながら、それでも人間と会話ができるということに俺は内心で喜んでいた。まともな言葉を誰かと交わすのは、いつぶりになるだろうか。
「お前の方は何してるんだ、こんな時間に」
「オレは、ただサボってるだけだよ。どうも学校は居心地悪いんだよな、幸いいじめなんかはないけどさ。勉強はしんどいし。このままじゃダメなんだろうけど……自分の未来に対して本気になれないっていう感じなのかな」
「そんなことしてたら俺みたいになるぞ。ていうか、家にはいなくていいのか」
「サボってるの、隠しちゃってるから。外に出ざるを得ないの。須賀さんは一人で暮らしてんの？」
「ああ。ニートやってた時に縁切られた」
なるほど、と妙に納得した顔で返された。心持ち腹が立った。
「じゃあ、もう行くけど、また来るから。そういや、オレは篠宮って言うんだ。よろしくな、須賀さん」
また来る気かよ、と内心呟きながら手を振る。あいつも、単純に話し相手が欲しいのかもしれないなと思った。

*

「やっぱこの時間居るんだな」
二日後、再び篠宮が来た。
「前から見てたのか」
「うん、適当にぶらついてた時に何回か見かけた」
篠宮が隣のブランコに座る。昨日は来なかったな、と投げかけると、なんかそういう気分だったから学校行った、と篠宮は言った。
「そうか。用はなんだ」
「用っていうか、まあ須賀さんのことを聞きたいだけなんだけどさ。須賀さんって、フリーターだっけ？　今は何してんの？」
本当に遠慮を知らない奴だと思いながら、正直に答えてやる。
「警備員だよ。夜間の」
「あ、だからこの時間ここで遊んでるんだ」
成程どうりで、と篠宮がつぶやく。別に俺は遊んでいるわけではないが、ただぼうっとしているだけだから大差はない。
「で、お前はなんでそんなに知らないフリーターの話を聞きたがるんだ」

「なんかさ、あんたみたいな人ってオレの未来の姿なのかなって思ってさ。親近感かな。あ、これ前も言ったかな。そういうわけで興味あるんですよ」
　オレたち両方に失礼な言葉だなこれ、と篠宮が笑った。せっかくなので笑い返してやった。
「今の生活、どんな感じ？　しんどい？　楽しい？」
「まあ、楽しくはねえよ。仕事は楽って言うより退屈だし」
　なんか趣味とかないの、と問われた。
「ああ、そういうのも何もねえな。暇な時間は大体なにもする気が起きねえし、何しても楽しくねえし。前はなけなしの金でうまい物食うのが楽しみだったけど、最近はどうも飯の味がしねえ」
　無軌道に視線を動かす。木々に目を留めながら、昔は木登りするだけでバカみたいに楽しかったなあ、と思い起こしてなんだか情けなくなった。もしかしたら、本当にバカだからやたらと高いところに上りたがっていたのかも知れない。
「……まあそんな感じだ。楽しくはない。けど、慣れた。人間案外慣れるもんだな。全然幸せじゃねえけど」
　篠宮は神妙そうに聞いている。
「とりあえず、なんか目標立ててみたりはしないの？　例えば脱フリーターとか」
「それはな……この頃ずっと、何をやったって未来は別に変わらないんじゃねえかって思っちまうんだ。失敗ばっかり繰り返して、いつの間にかそういう感覚が染みついてたのかな。何をしたって変わらないなんて、多分そんなのは思い込みなんだろうけど。分かってても、どうすりゃ前向きになれるかは分からねえや」
　いい加減にブランコを揺らした。ぎいぎいと鳴る金具の音が、少し心地よかった。
「あとな、なんだか……なんだか、もういいんだ。幸せじゃなくても、もういいやって満足しちまってるのかな。それとも、諦めてるだけか」
　気づかないうちに、やけに饒舌になっていた。篠宮もさっきより真剣な面になっている。
「まあ、こんな話でも吐き出すのは結構気分悪くないから。お前、鬱陶しいけど話聞いてくれるのは助かるぜ。ありがとな」
「それならよかったよ、やたらとちょっかい出してんのはオレだから。……大人は大変だってやつかな。オレにはまだ難しいや」
「ガキには分からんだろうな、はは……分からなくてもいいんだ。多分、分からないままのほうがいい」

*

『やった、ようやく内定だ……！』
『おお、よかったじゃないか！』
『長かったなあ、本当に……』

『もう、俺は限界だから。辞めるよ』
『そうか……それが正解なんだろうな、きっと。元気でな』

『つまり、クビですか』
『ああ。君は、ここじゃない場所で頑張った方がいい』
『……』

　公園の見慣れた景色が目に映る。どうやら、夢を見ていたようだ。それを思い返しながらなんとはなしにブランコを揺らしているうちに、篠宮がやってきた。
「須賀さん、なんでいつもブランコにいるの？　別んとこにいる方がまだ不審者っぽくないと思うんだけど」
「……まあ、確かにな」
　ここが落ち着くんだがな、と内心思いながらベンチとかの方がいいわなと返した。これからは場所を変えようか。やむを得ない。
「なんか考え事してた？」
　篠宮がそう聞いてくる。鋭いやつだ。あるいは俺が分かりやすい奴なのか。
「そうだな。……夢を見た。昔の記憶の」
「そうなんだ」
　篠宮は表情で興味を表してきたが、直接聞いてはこなかった。
「……ギリギリの就活で掴んだ内定はブラック企業。体壊して三年で退職、社会復帰の昼間バイトは向いてなさ過ぎてクビになって、今は夜勤で食いつなぐ」
　気づけば、何かに動かされるように吐露し始めていた。
「昔から夢なんかなくて、ああ、学生時代なんてろくに覚えてないくらいだ、薄っぺらかったんだろうなあ……まあ、大人になったらそれなりに安定した生活が送れりゃいいなって思ってたんだ。だけど、そうやって普通に生活することだって、こんなに難しかったんだな」
　こちらをじっと見つめる篠宮の面持ちにも、影が差していた。

「いつからか、段々と周りの世界に対する実感みたいなもんがなくなりだしてるような感じがするんだ。俺の心が空虚になって――空虚になって、そうしていろんな現実から逃げようとしてんだろうな」
脈絡が飛んでいる話だと自覚しながら、ただ思うままに言葉を紡ぐ。
「だけどさ、時々……たとえば、今とか。急に、自分の現実を思いっきり直視しちまう時があるんだ。そうしなきゃいけないような感覚に駆られて。それでさ、」
もしかしたら、語ることで何か得体の知れないものから逃げようとしているのかもしれない。
「――こんな何の役にも立たない人間にはなりたくなかったなあって、少しぐらいは誰かを助けられる存在でいたかったなあって、そういう後悔に押しつぶされそうになるんだよ。そうだ、夢なんかないって言ったけど、漠然と誰かの役に立ちたいって思いだけはあったような気がする……」
「……でも、ただフリーターやってるだけでも案外何かの役に立ってる、かも」
自信なさげに篠宮が言う。きっと、こいつも真剣に考えているんだろう。
「ああ、それもそうだな。でも、そこには代わりがいるんだ。こんな俺は、どっかに行っても穴埋めができるような存在以上の何者でもないんだ」
そっかあ、と篠宮がこぼす。俺はまた意味もなくブランコを揺らす。
「なんか、ごめんな。大したこと言えないチビで」
篠宮が小さく言った。
「いや、……ただただ聞いてくれるってのもありがたいもんだ。しゃべりたいだけしゃべって黙れる」
話し疲れた頭に、ジイジイと鳴く虫の声がいやにうるさく響く。ふと、目の前の道路の向こう側に子供を見つけた。そういえば、この付近で子供を見かけるのは珍しい。
「あれ、一人……？　親はどっかに置いてけぼりにされてんのかな」
「危ねえな」
不審者――俺のようにまだ無害な不審者ではなく、もっと危ない不審者――に狙われたら一人では逃げにくい。それに、不用意に道路に飛び出したりしたら――
「あ、おい逃げろ――！」
「っ」
勝手に足が、体が動き出していた。
ブレーキ音。子供のはっとした顔。飛び出して、捕まえようと手を伸ばす。触れたのは、体と体。背後で、風切り音。
気づけば、地面を転げていた。痛むのは、ただの擦り傷だ。
「……おいガキ、大丈夫か」
なにがなんだか分からないまま泣き出しそうな表情で、しかしそいつはしっかりと返事をした。
「二人とも、大丈夫！？なんか、変なとこ打ったりしてない！？」
「おう」
篠宮が左右を確認してからこっちへ渡ってきた。いつのまにか、さっきの車は去ってしまったようだ。子供を立たせて、自分も立ち上がる。それと同時に、誰かが駆ける足音が聞こえてきた。そちらを見やると、母親らしき女性だった。
「康貴、それに……あなたも、大丈夫ですか！？」
「ええ、二人とも」
どうやら、一部始終は見ていたらしい。いちいち大丈夫かと聞かれるのも面倒だなと思った。口には出さなかった。聞くと、少し目を離していた隙にはぐれてしまい、見つけた時にはもう俺が飛び込んでいたらしい。
「ありがとうございます、本当に……どうお返しをすればいいか……」
「いえ、そういうものは何もなくても……」
そう言ったのは、単純な見栄だっただろうか。いや何かしないと、いや何もいらないとやり取りを繰り返しているうちに、傷用の絆創膏をもらうということで手打ちになった。いやなんでだよ、と篠宮がひっそりとつぶやいた。別れを告げて、去っていく彼女たちの背中を眺める。ふいに深呼吸をしてみたくなり、吸った空気にこれまでとは違う感覚を覚えた。
「……オレ、飛び出せなかったよ。けど、須賀さん速かったよな。この場所では、須賀さんにしかできなかったこと、あったじゃん」
なんだか俺より嬉しそうに、篠宮はそう言った。浮ついたような気持ちで、ただただその言葉を聞く。まだ実感が追い付かないままに、そうか、と返した。

*

「めっちゃボーっとしてんね須賀さん。意識ある？」
「……おう」
翌日、篠宮が相変わらずやってきた。
「あのな、俺な、再就職本気で目指すわ」
「え、そうなんだっあああああ」
ブランコに座ろうとしたタイミングで俺の言葉を聞い

た篠宮が体勢を崩したが、危うく踏みとどまった。
「危なかった……それで、再就職目指すって本当？　頑張ってよ。でもどうして急に……って、この言い方はおかしいか」
「そうだな、」
数多の失敗を思い起こす。
「俺さ、全部自信がズタボロになってたせいなんだと思う。何しても楽しくなかったのも、ろくに努力ができなかったのも」
そして昨日を思い起こす。
「けどさ、昨日あれがあってから――あのとき俺の手で助けられたから、俺も捨てたもんじゃないなって段々思えてきちまったんだよ。ただ一回うまくいっただけ、それだけなんだけどさ」
親子の姿を思い起こす。
「あんな風に思いっきり感謝されることも、ずっとなかったんだよな。だから、こんなに簡単に俺の心は動き出してるんだろうな」
「それなら、よかったじゃん。前さえ向ければもう半分勝ちみたいなもんじゃない」
これもすぐに消えてしまう気持ちなんだろうか、と自問してきた言葉を篠宮にぶつけると、その通りかそうじゃないか確かめるために色々やってみたらいい、と返された。元よりそのつもりだった。
「まあ、そういうわけだから。俺はどうにか這い上がるぞ」
「そっか、須賀さんはダメ人間卒業するのか」
「悪かったなダメ人間で。お前はどうするんだ」
言われ、篠宮はしばし考え込む。
「うん、オレも……このままサボってばっかじゃダメだよな、頑張ろうと思う。まずは何を頑張るのか考えるところから頑張る。とりあえず学校行きつつ」
とにかく、そんな感じでお互い頑張ろうな、と篠宮は笑った。
「今更だけど、『お互い頑張ろうな』とか、同級生相手にかけ合うような言葉を俺たちがかけ合ってる状況はなんだか妙だな」
「たしかに」
あるいは、こうして並んで座っている状況そのものがおかしいような気もする。俺はこいつから訳の分からない距離の詰め方をされた最初の時点から警戒心も何も持っていなかったし、こいつはと言うとブランコを揺らしてる不審者に話しかけてろくでもない話を聞かされながらもやたらと付きまとってくる。孤独は人恋しさで人間をおかしくさせるということだろうか。こいつがどの程度孤独なのかは知らないが。
「でもさ、須賀さんがふらつくのやめて、オレもサボらなければ会うことないんだよな」
「なんだ、連絡先でも欲しいか？」
「あ、それいいな！」
そして篠宮がスマートフォンを取り出す。しくじった。冗談のつもりだったのだが。
「そうだ、まったく聞いてなかったけど、須賀さんどこらへんに住んでんの？この公園の近く？」
「まあ、そうだな。こっから歩いて10分程度だよ」
「よし、いいじゃん。いや、たまに須賀さんの家遊びに行きたいなって思ってさ」
「お前、ちょっとは同年代の友人作る努力もしろよ？」
「わかってるって」
じゃあまた、と言って篠宮は去っていった。自分もそろそろ帰ろうと立ち上がる。――心が気づいたのは多分、まだ全てが終わってしまったわけじゃないってことなんだろう。目に見える何かが変わったわけではないし、何もできない日々に消えていった時間が取り戻せたわけでもないけれど。歩き出す足に、土を踏む音に、かすかな風の香りに、心地よさを覚えた。